プラットホーム

雷雨の通り過ぎた後
真っ青な空と真っ白な雲―――
僕は「わたし」というものの欠片を探していた
それに押しつぶされた時間とともに

プラットホームから斜め下を見下ろすと
2本の銀のレールが敷かれていた
きわめてゆっくりと近づき
そのレールを覆い隠してゆく車両

生というものに
意思など不要であることは自明の理である、と
反射する光が微笑している
目映い反射

繰り返し、繰り返し追体験する
粉々に破壊しては欠片を探す―――
「君」と呼ばれること
淀みきった時間

ゆっくりと入ってくる銀色の車両
次第に覆い隠されてゆくレール
青い空が映っているレール
そこに覆いかぶさってゆく車体

何故探す必要があるのかと問われれば
僕は答えるだろう
「『わたし』が意思を手放しているかどうか
それを確かめるためである」と

次第に覆いかぶさってくる車体
ゆっくりと近づくレール

(2012.8.18)